

書 評 と 紹 介

鎌田とし子著

『「貧困」の社会学』

——労働者階級の状態——

評者：宮本 みち子

はじめに

本書は、著者のこれまでの研究の集大成ともいえる大作である。あとがきによれば、鎌田の生涯にわたる研究は3分野から構成されている。1部は「階級・階層論」、2部は「家族論」、3部は「貧困論」である。1部に関しては、『社会諸階層と現代家族』（御茶の水書房）、『日鋼室蘭争議30年後の証言』（御茶の水書房）としてすでに出版されている。2部に関しては、『貧困と家族崩壊』（ミネルヴァ書房）、『男女共生社会のワークシェアリング』（サイエンス社）、『ジェンダー』（東京大学出版会）としてすでに出版されている。これら2つの分野の研究をあらためて貧困という切り口で再編成したものが、本書『「貧困」の社会学』である。こうして3部作が揃ったことで、研究生活は「完全燃焼したと思う」と鎌田は述べている。

本書の構成

まず、本書の構成をみてみよう。本書は6つの章で構成されている。第1章は、「社会諸階級・階層関係と「貧困階層」」である。まず、

貧困を研究する際の「方法」を述べ、出発点として戦後日本資本主義の蓄積段階の規定を行い、労働者諸階層の生活過程の枠組を立て、それに関係する従来の諸研究を整理する。つぎに日本の階級構成における貧困階層の階級・階層的地位と家族の関係を整理する。第2章は、「生活構造論と社会階層論」である。まず、籠山京、中鉢正美の生活構造論、氏原正治郎、江口英一の社会階層論を中心に検討する。その後、都市研究、構造機能論、主体性論、階級理論など社会学における生活構造論を対比する。そして、貧困研究における社会階層の概念を検討する。第3章は、「貧困と家族崩壊」である。これは1964年から99年までの長期にわたる階層別の家族の実態調査から、都市底辺層調査をまとめたものである。本章には多くのページ数が割かれ、鎌田の膨大な研究成果が詰まっている。ここでは社会層検出のための指標として、①生活諸次元の差異（家族の所得構造と家族の内部構造と外社会へのかまえなど）、②社会層形成過程の差異（世代間・世代内移動）、③家族の生活史の3尺度が使用されている。

以上の第1章から3章までは、高度経済成長前半期の日本資本主義分析に主眼が置かれている。第4章以後は、後半期から2000年代の現実を踏まえた研究となっている。まず第4章は、「世帯単位主義」からの離陸で、世帯単位主義を日本社会が持つ特殊性と位置づけ、二重構造と結びついた企業規模別、雇用形態別、男女別賃金格差と結合したものにとらえる。その一方で、夫世帯主の手から夫と妻2人の手へ、さらには妻優位の家計さえ現れている実態を示し、個人に自立可能な賃金が支給されているか、個人単位であっても生活可能な社会保障制度が

確立されていることが、世帯単位主義に潜む貧困から抜け出す道だとする。第5章は、「労働力の価値分割と生活単位の個人化」である。1960年代から現代にかけての生活構造の変容を、労働力の価値分割と生活単位の個人化、と把握する。1960年代の不安定雇用者が、妻や同居の成人子、老父母が総出で働いて家計を維持する「賃金持寄り型」に特徴があったのに比べて、1980年代以後は、家族共同体の崩壊と生活単位の個人化現象に特徴がある。こうして、日本の含み資産であった家族制度と企業福祉が喪失した後、個人の生活危機を支える共同体とはいかなるものになるのか。鎌田は、「包括的社会保障国家」ないし「1人になっても生活できる社会」「普遍的福祉社会」に活路を求める。それゆえ鎌田は、自身の研究の流れが社会学の生活研究から社会福祉へと進んだことには必然性があったとするのである。

第6章は、「個人単位的生活と普遍的福祉社会」である。日本型福祉社会の限界を超えて日本が目指すべき社会モデルを鎌田はスウェーデンにみる。生産の面では資本主義、分配は社会主義的政策でという混合経済をとるスウェーデンは、資本主義でありながら競争原理を一步越えた連帯と共同の原理に立つ社会であり、社会主義崩壊後は、社会主義に代わる社会モデルと位置付けるのである。

生産と生活の結節点としての家族

3部から構成された鎌田の50年に及ぶ研究の流れは、経済学の「窮乏化研究」、社会政策学の「生活構造研究」、社会学の「家族研究」という3つの方法の結合にある。その研究は、戦後の農地改革によって地主・小作関係を払拭した段階で、どのような世帯が戦後日本資本主義を支えているのかを明らかにしたいという問題意識からスタートしたものであった。このよ

うな着眼と方法に影響を与えたのは、山田盛太郎の『日本資本主義分析』であった。山田は、地主と産業資本家という2つの階級関係を下から支える小作貧農世帯の「賃金持寄り家族」に着目し、これが戦前の日本資本主義を支えた典型的な世帯であるとした。この認識に触発された鎌田は、山田が着目した小作貧農世帯に代わって戦後の新たな原始的蓄積期を担う世帯とはいかなるものかを明らかにしようとしたのである。

地主小作関係が払拭された戦後社会においても約半数を占める農民が、独占的大企業と中小零細企業という二重構造の底辺を支えてきた。そのことが、かなり長い期間にわたって旧い職業を残存させ、兼業農家世帯と出稼ぎ農民を存続させてきた。しかし、鎌田が、1960年代に鉄鋼産業都市である室蘭市をフィールドに、大企業とその下請け中小零細企業とその関連の下層労働者を選定して実施された調査研究によれば、高度成長期に入ると都市には独占企業労働者（社会層1）、中小企業労働者（社会層2）、および臨時・日雇労働者（社会層3）の3層構造が確立していた。その中で、資本主義の蓄積構造を担ったのは、社会層2と3に見られる「都市労働者間の賃金持寄り家族」であった。

鎌田の研究は、労働者諸階層の実態を把握するに際して、生産と狭義の生活を一つの「生活過程」と捉え、両者の結節点に「家族」を置いた点に独創性があった。具体的には、家族の所得構成に焦点を当てて、社会層別家族を析出し、それが日本資本主義を支える土台となっていることを明らかにしたのである。なお、鎌田は社会層という用語を社会階層とは峻別して用いている。さらに、社会層別家族を特定するにあたって着目したのは、家族の生活周期に違いがあるという点であった。律動的生活周期、完結型生活周期、断絶型生活周期、跛行型生活周期の

4タイプが、社会層を識別するのに有効な差異であることを明らかにしたのである。

貧困研究として鎌田の研究の注目すべき知見は、臨時雇、失対労働者、失業者、内職者、生活保護受給者などから成る社会層3は、所得構成でいうと賃金持寄り型家族を形成できず、生活周期でいうと、断続型または跛行型周期を描くことであった。この社会層はすべての社会層のなかで家族規模がもっとも小さく、貧困がもっとも明確であり、家族崩壊が起きているのである。

二重構造のなかの賃金持寄り型家族

日本の福祉は、強固な「家族制度」と「企業福祉」によって担われてきた。二重構造のなかに置かれた中小零細企業労働者は、一人の賃金では生計が成り立たないが、夫婦、親子など家族が賃金その他の所得を持ち寄ることによって低賃金をカバーし、含み資産としての家族として機能してきたことが、鎌田の一連の調査から明らかにされている。しかし、一人が一人分の生活しか維持できない賃金が一般化すると、家族は個人化を強め、寄り添って生活する物質的基盤を失っていく。

鎌田の研究の醍醐味は戦後の原始的蓄積期としての高度経済成長前半期を担った社会層の生産—生活過程を、所得構成と生活周期の明確な違いとして明らかにした点にあった。現下の日本の状況からすると、高度経済成長後半期からバブル崩壊まで、およびバブル崩壊から現在までに何が起ったのかを、鎌田の方法論で明らかにしてみたいという想いにかられる。しかし、この期間の鎌田の研究は家族のジェンダー関係にシフトし、1960年代の社会層の生活過程分析に対置できる包括的で緻密な研究は残念ながらみられない。グローバル経済化が進みバブル経済が崩壊した後、日本の社会諸階層の家族に

どのような変化が生じたのか、それを鎌田特有の階級・階層論を適用することが有効であるのかどうかを検討することは、後継世代の仕事なのかもしれない。

おわりに

鎌田の労働者諸階層調査は1950年代末に開始され、室蘭を中心に北海道内で毎年のように調査は継続され、80年代末まで続いている。さらに90年代には東京、浜松などへと拡大している。戦後半世紀にわたる日本資本主義の歴史を労働者の生活に焦点をあてて記録し続けた希有の研究といえることができるだろう。分厚い実態調査データによって真実を語らせようという社会学者の姿勢には圧倒されるものがある。序章に書かれているように、資本主義はどの段階にあるのか、「困難」はどんな階級・階層関係のもとで起きているのか、どんな社会を目指すのかという問題意識を持ち続け、追求し続けた研究者であることを感じる。

日本資本主義の成熟化と社会主義国の崩壊後、マルクスの理論は古くなったと喧伝されたことに対して、マルクス理論に立脚して研究を進めてきた鎌田は、「少なくとも資本主義社会の分析に関する限り、まだこれを超える「方法論」は出てきていない」。それが確立するまでは、また一国経済の分析が全く意味を持たなくなる段階までは、マルクスのいう資本の運動法則と窮乏化論、相対的過剰人口が資本蓄積に果たす役割はそのまま生きており変更の余地はないという。

その一方で、資本主義の窮乏化が戦う主体を作り、自らの力で窮乏化からの脱却または変革を成し遂げるというマルクスの法則が実現しなかったことを認める鎌田は、今現実に見ることのできる理想社会として、民主主義を徹底して追求し、自分たちでかたちを決めた社会民主主

義国家としてのスウェーデンにめざすべき社会モデルを見ているのである。

戦後日本のマルクス主義者が辿ったひとつの道を垣間見る思いがする。

(鎌田とし子著『「貧困」の社会学——労働者階級の状態』御茶の水書房、2011年8月、x+403頁、定価8600円+税)

(みやもと・みちこ 放送大学教養学部教授)

●好評につき、増刷！半世紀にわたる実証研究の成果

『貧困の社会学』 労働者階級の状態

鎌田とし子 著

少子高齢化の進む現代日本における「学校統廃合と人口問題」の補章を追加

増補版 学校統廃合の研究

若林敬子 著

九〇三〇円

●新刊案内

鈴木和雄 著

六九三〇円

接客サービスの労働過程論

従来の生産労働を中心とした労働過程とはいちじるしく異なる接客サービス労働過程が提起する諸問題を、接客労働の3極関係、感情労働、労働移動という3つの主題にそくして理論的に考察する。

●本書の内容

序章 本書の目的と構成
接客サービス労働とはなにか

第Ⅰ部 接客労働の3極関係

第一章 3極関係と接客労働者

第二章 接客労働の統制方法

第三章 統制の歴史的展開
——初期デパートにおける労働統制の諸問題

第Ⅱ部 感情労働

第四章 感情労働と労働過程の統制

第五章 感情労働とジェンダー

補論 感情労働論と労働過程論

第六章 感情労働論の批判

第Ⅲ部 労働移動

第七章 スーパーマーケットにおける経験

第八章 病院における経験

終章 接客労働過程論の展望

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 電話03-5684-0751 <http://www.ochanomizushobo.co.jp/>